研究区分	教員特別研究推進　地域振興

研　究 テーマ	静岡県内地域方言の社会言語学的研究				
研究組織	代　表　者	所属・職名	国際関係学研究科・教授	氏名	長野　明子
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	国際関係学研究科・教授	氏名	長野　明子

講演題目

静岡県内における方言および方言的表現の世代別使用実態

研究の目的、成果及び今後の展望

(1) 目的

NZ 英語における「その土地固有の話し方(vernacular speech; VS)」の使用実態について，ある有名な研究は言語使用と話者年齢の間にU字型の相関がみられたと報告する。子供と青少年においてよく使用される VS は働き盛りの世代のことばではいったん影を薄め，退職後，話者の年齢が上がるほど VS の使用率がまた高くなる，という観察である。このようなパターンは日本語地域方言においても再現されるかを本県にて調査した。本研究には，学部グローバル・コミュニケーションプログラムに属する 3，4 年次学生を対象とする，言語情報調査法・分析法の指導という 2 次的目的もある。

(2) 実施内容

方言辞典等から言語項目(=調査対象とする言語表現のこと)を選ぶと，必然的に古色蒼然としたものになりがちである。そこで，県内出身学生の日常的感覚で VS と思われるものをリストさせた。ここには静岡の地域方言ではないものも含まれたがあえて除外しないことにした。令和 5 年度の調査分も含めると，8 種(R5) +6 種(R6)の言語項目について，249 人(R5) +426 人(R6)の調査協力者から使用実態に関する情報を収集した。情報収集は対面での質問紙調査の方法で行った。

(3) 調査結果

第 1 に，興味深いことに，モデル・ケースとされる U 字型パターンは合計 14 種の言語項目のいずれにも観察されなかった。第 2 に，本研究で観察したのは，話者の年齢が高くなるに従って VS の使用度も高くなるもの(「アップ型」)，逆に VS の使用度が低くなるもの（「ダウン型」)，VS の使用度が話者年齢と関係せず，年齢軸と平行的になるもの（「平行型」）の 3 パターンである。第 3 に，これらの相関の型は，言語項目の文法的な範疇とおおよそ対応していた。つまり，動詞はアップ型を示したが，文末詞や名詞接辞はダウン型を示した。「舌べろ・舌べら」という複合名詞は平行型であった。

(4) 考察，課題，展望

NZ 英語と異なり，今回の調査ではなぜ U 字型は見られなかったのか。NZ 英語の研究は U 字型を話者のライフスタイルという観点で説明している。もしそれが正しければ，(3)の結果は現代日本のライフスタイルについて(研究当時の)NZ とは異なる実態があることを推測させる。また，(3)の結果は，社会言語学的観点のみならず，言語の構造・文法体系が VS 使用の世代間差に影響を与えていることを示している。調査方法の洗練，項目の追加，学会での発表といったことを行い，研究プロジェクトとして成熟させていく必要がある。またそれによって，静岡方言の研究に寄与したい。